

						昭 15	年 月 日	錦州陸軍兵事部略歴
						7		
11	10	9	8	8	8	10		
下旬	17	上旬	25	17	9		概	
<p>満州里經由入「ソ」</p> <p>部長は南嶺収容所に移送され将校大隊に編入</p> <p>部長を除き「ソ」軍指揮官の指示により解放</p> <p>武装解除、錦州第八〇四部隊に収容</p> <p>停戦</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>爾後同地において徴兵、動員、在郷軍人の現地指導等兵事業務に従事</p>						<p>軍令陸甲第一四号により錦州において関東軍兵事部奉天支部よりの要員を基幹として編成完結</p>	要	
							摘要	

1612

						昭 20	昭 15	年 月 日	齊々哈爾陸軍兵事部略歴	
10	10	8	8	8	8	8				概
9	8	18	18	10	9	20				
齊々哈爾出発						軍令陸甲第一四号により竜江省齊々哈爾において関東軍兵事部齊々哈爾支部を改編し編成改正完結		摘 要		
主力は齊々哈爾第一一作業大隊に編入						爾後同地において徴兵、動員、在郷軍人の現地指導等兵事業務に従事				
齊々哈爾兵器廠において武装解除						日「ソ」開戦				
軍属を哈爾浜方面に退避せしむ。						防衛召集を実施し坂田中佐を長とし召集者約五〇〇名をもつて特別警備隊を編成せんとしたが停戦となり全員を解散せしむ。				

1614

			昭 20
	8	11	10
	17	1	27
	<p>満州里經由入「ソ」</p> <p>一部は齊々哈爾第五一九労働大隊に編入、同地出發入「ソ」</p> <p>哈爾浜に退避した軍属解散</p> <p>部長</p> <p>大佐 池田 武</p>		

										年 月 日	
昭 14		昭 13				昭 12		昭 11			
6	6	3	12	8	3	12	8	6	12		
22	20	11	12	5	13	12	8	14	5		
<p> 関東軍直轄部隊として部隊長以下全員軍医薬剤官及び衛生下士官兵をもつて編成し各部隊の防疫給水及細菌の研究予防等の業務に従事す。(昭二、一二、以前については省略) 第二次編成改正完結。(哈爾濱) 昭和十二年軍令陸甲第三号及び同四号により満州駐屯陸軍部隊編成及び編成改正下令。 編成改正完結。(哈爾濱) 第二次編成改正完結。 第三次編成改正完結。 昭和十二年軍令陸甲第四号に基く第四次編成改正完結。 第五次編成完結。(哈爾濱) 昭和十二年軍令陸甲第四号に基く第六次編成改正完結。 関後令第一三一六号により関東軍第二防疫給水班編成下令。 編成完結。(哈爾濱) </p>											
										略	
										歴	
										摘要	

関東軍防疫給水部略歴
 (関東軍防疫部)

通称号 徳第二五〇二、二五〇三、二五〇四、二五〇五、二五〇六、八七四七部隊
 満第六五九、六四三、一六二、五四三、六七三、三一九部隊

昭 20	昭 15	昭 8	昭 8	昭 7	昭 12	昭 8	昭 10	昭 6
6	15	8	8	7	12	8	10	6
15	22	1	10	7	6	上	23	
<p> 部長以下一部「ノモンハン」事件に参加。 陸満機密第四号により編成改正完結。 陸満機密第一四号により編成改正完結。 軍令陸甲第一四号により関東軍防疫部編成改正下令。 関東軍防疫給水部と称号変更。 「ハルビン」において編成改正完結。 左記の編成をもつて、細菌の研究を担当、各部隊の防疫給水、血清、痘症、予防ならびに練成隊において青少年の教育を実施す。 本部「ハルビン」 総務部、第一、二、三、四部 資材部 教育部（練成隊） 診療部 支部 牡丹江、孫吳、林口、大連、海拉爾。 関東軍命令により「ベスト」防疫隊を編成大連支部に編入せしむ。 開戦前における本部及び支部の配置の状況次の如し。 本部 「ハルビン」中將 石井 四郎 以下約、三〇〇名 支部 海拉爾 少佐 加藤 恒則 約一六五名 牡丹江 少佐 尾上 正男 約二〇〇名 </p>								

	8	8
	15	10
	9	9
<p>孫 吳 中佐 西 俊 英 以下約一三六名</p> <p>林 口 少佐 榊 原 秀 夫 以下約二二四名</p> <p>大 連 技師 安 東 洪 次 以下約二五〇名</p> <p>本部は開戦と共に北朝鮮方面に移動すべく南下開始、孫吳支部は第一二三師団の北孫吳陣地に入る。</p> <p>同日、海拉爾支部は夕刻全員自動車にて開嶺に向つて出発、女子軍属は「チチハル」に避難せしめる。</p> <p>林口支部は二〇名を残置林口出発八月一三日七星に到着。</p> <p>牡丹江支部は掖河に前進し愛河の線にある部隊の防疫給水に任じ同日「ソ」軍の進出により拉古に後退次いで横道河子に後退す。</p> <p>停戦。</p> <p>停戦に伴ない「ソ」軍により左の如く武装解除されたる後入「ソ」(帰還)す。</p> <p>「本部は新京付近を南下中停戦となりその儘南下し釜山より昭和二十年八月二十六日より九月五日にわたり仙崎、萩、米子にそれぞれ上陸復員、主力出発時「ハルビン」残留の人員は双城堡において「ソ」軍に収容されたる後入「ソ」</p> <p>「大連支部は停戦後その儘「ソ」軍に利用され中国長春鉄道大連研究所と改称し勤務せしめられたる後一部は邦人に混入一部は安東、「ハルビン」、北支、</p>	<p>8</p>	

山東方面に移送せらる。

「牡丹江支部は横道河子において（一部離隊者を除く）主力は拉古に移されたる後入「ソ」す。

「孫呉支部主力は孫呉において武装解除されたる後入「ソ」。

「海拉爾支部は八月十五日「ブハト」に移動八月十六日同地において武装解除され「チチハル」に移されたる後入「ソ」。

「林口支部は南下中八月十四日「ソ」軍戦車の攻撃を受け分散一部は一面波及び東京城大部は横道河子において武装解除されたる後入「ソ」。

「ベスト防疫隊は奉天において武装解除されたる後居留民会所属の病院を開設し二十一年八月国府軍の接収によりその大部は同年帰国す。

部長

中将 石井 四郎

昭 18	昭 20	昭 18	年 月 日	略 歴	摘 要
8	8	12	8	7	
31	15	上旬	31	15	
<p>「新民支廠」(満第二二九一部隊) 奉天省新民において編成完結。</p> <p>部隊長 獣医 大佐 浜田 六太郎</p> <p>軍令陸甲第六九号により編成下令。 新京において第一四、一五、一八兵站病馬廠の人員を基幹として編成完結。 同日関東軍司令官の隷下に入り支廠を新民、牡丹江、東安、齊々哈爾、敦化に設置し病馬の収容及び診療業務に従事。 四平省開原に移駐、病馬収容業務及び下士官候補者の教育に従事。 通化に移動準備中開原において停戦。 停戦に伴ない軍属を解散せしめ爾後八月二十九日武装解除され、三十日部隊解散後開原新公園に集結「ソ」軍命により豆樺バルブ工場の解体作業に従事せしめられ十月南嶺収容所に移動されたる後満州里經由入「ソ」す。</p>					

関東軍野戦病馬廠略歴

通称号

徳第二五二九六部隊

満第二二九〇、二二九一、二二九二、二二九三、二二九四、二二九五部隊

1620

昭 20	昭 19	昭 18									
6	3	7	5	8		9	9	8	8	8	8
1	頃	頃	頃	31		17	15	17	15	13	9
<p>爾後新民において病馬収容業務に従事。 新民において開戦。 安東省鳳凰城に移動のため菅生中尉以下を先発隊として出発せしむ。 本部は新民において停戦、同日鳳凰城に向け出発。同日先発隊鳳凰城着。 本部鳳凰城着。 安東に移動。 安東駅において「ソ」軍により武装解除され同日奉天に向け出発、爾後北陵収容所に収容されたる後作大に編入され黒河經由入「ソ」。</p> <p>支隊長 獣医大尉 新田正三</p> <p>「牡丹江支廠」(満第一二九二部隊)</p> <p>牡丹江において編成完結。出張所を牡丹江省老黒山に設置し病馬収容業務に従事。</p> <p>病馬放牧のため一部を牡丹江省代馬溝に分駐せしむ。 牡丹江省樺林に移駐。 主力は原駐地牡丹江に移駐。 樺林において特別補充獣医部下士官候補者の教育実施。</p>											

1621

			昭	昭									
			20	18									
7	7	6	6	8		8	8	8	8	8	8	8	8
16	15	28	27	31		18	16	15	14	12	10	9	1
<p>老黒山出張所は教化支廠と改称され第一方面軍の指揮下に入らしめらる。 第五軍病馬収容のため藤井中尉以下を牡丹江省磨刀石に派遣す。 教育隊を解散。 磨刀石派遣の藤井中尉以下帰隊。 牡丹江省横道河子に向け出發。 転進途中停戦。 横道河子に集結。 同地において「ソ」軍により武装解除されたる後綏芬河經由入「ソ」す。 支廠長 獣医大尉 堀 沢 大 四 郎</p> <p>「東安支廠」(滿第一二九三部隊) 東安省東安において編成完結。 本部は東安に位置し東安省鶏寧に出張所を設置し病馬収容業務に従事。 間島省龍井移駐のため平川中尉以下二〇名を先發隊として出發せしむ。 先發隊龍井着。 主力東安出發。 龍井着。</p>													

昭 20					昭 18				
8	8	8	3	8	8	8	7	7	
18	15	9	30	31	26	22	15	18	17
<p>支廠長 獣医大尉 三輪修一</p>					<p>支廠長 獣医大尉 原茂</p>				
<p>主力は齊々哈爾北大営において「ソ」軍により武装解除されたる後満州里經由「ソ」。</p> <p>齊々哈爾において停戦。</p> <p>開戦と共に海拉爾出張所を閉鎖、齊々哈爾本部に復帰せしむ。</p> <p>本部は齊々哈爾北大営に移駐す。</p> <p>本部は孫呉に位置し出張所を興安北省海拉爾に設置し病馬收容業務に従事。</p> <p>黒河省孫呉において編成完結。</p> <p>「齊々哈爾支廠」(滿第一二九四部隊) 滿第一二九七部隊</p>					<p>間島收容所に收容されたる後琿春經由「ソ」。</p> <p>同地において「ソ」軍により武装解除せられる。</p> <p>龍井において停戦。</p> <p>龍井本部に復帰。</p> <p>鶏寧出張所出発。</p>				

	昭 20							昭 18
	8	8	8	8	8	8	8	8
	22	15	14	10	6	4	1	31
支廠長 獸医中尉 石田忠男	<p>「敦化支廠」(滿第一二九五部隊) 牡丹江省老黒山において編成完結。 牡丹江支廠老黒山出張所と呼称し病馬収容業務に従事。 敦化支廠と改称同日第一方面軍司令官の指揮下に入らしめられる。 吉林省敦化移駐のため鈴木中尉以下二二名を先発隊として老黒山を出発せしむ。 先発隊敦化着。 主力老黒山出發。 主力敦化着。 吉林省敦化において停戦。 同地において「ソ」軍により武装解除されたる後間島収容所に収容され爾後理 春經由入「ソ」す。</p>							

昭和11年		昭和10年		昭和9年		昭和8年		年月日	略歴	摘要
11	8	6	9	6	9	7	3			
	1	25	10	末	中	1	15	12		
<p>通称号 徳第二五二〇七部隊 満第一〇〇部隊</p> <p>軍令陸甲第一六号により編成下令。 新京において編成完結。 爾後新京において軍用動物の検査、防疫、試験研究の業務及び獣医部下士官の教育業務に従事すると共に在支野戦軍馬防疫の指導に任じた。 大連に出張所設置。 一部をもつて関東軍臨時病馬廠を編成「ノモンハン」事変に参加。 軍令陸甲第一四号により編成改正完結。 同日牡丹江に支廠設置。 内蒙古家畜資源調査のため平棧中尉以下二十名を関東軍情報部海拉爾支部に派遣。 牡丹江支廠主力は第一方面軍の指揮下に入り牡丹江出發南下。 主力は新京において停戦。 停戦後の部隊行動次とおり。 主力は八月十五日新京出發、安東経山雨下途中平壤において牡丹江支廠を掌</p>										

1625

握し更に南下八月二十一日京城着、同日より朝鮮軍の指揮下に入り軍属は解散、軍人は各部隊に夫々配属され復員。
一、大連出張所及び海拉爾派遣隊は復帰困難となり所在地高級指揮官の指揮下に入り行動を共にした。

部隊長

獣医少将 若松 有次郎

1626

											年 月 日	
昭 20		昭 19			昭 17		昭 16		昭 13			昭 12
8	8	7	6	5	1	12	11	4	5	1		4
10		9		1			4					
<p>柳樹屯において編成 旅順に移駐 学生は全部原隊に復帰 職員は各司令部に転属 教育再開 主力を遼陽に移駐 陸満密一四三一号により「関東軍歩兵第一幹部教育隊」と呼称 甲種幹部候補生入隊 軍令陸甲第七五号により「関東軍歩兵第一下士官候補者隊」に編成改称 教育終了、原隊復帰 将校特別補充の学生及び乙種幹部候生入校 日「ソ」開戦 特別甲種幹部候補生（在満者一五〇名）入隊 教導隊、乙種隊准曹隊は原隊復帰</p>												概
												要
												摘 要

関東軍歩兵第一下士官候補者隊略歴

通称号

満第四一五部隊

徳第一三九八〇部隊

1627

	8	8	8	8	8
	26	20	18	15	13
<p>動員下令突撃旅団編成に着手、一、二〇〇名召集したが完結せず終戦となる。</p> <p>停戦</p> <p>応召者一二〇〇名召解、軍属三七名解雇</p> <p>遼陽において三五〇名武解</p> <p>遼陽出發、海城収容所に入る</p> <p>主力は九月三日海城第七作業大隊に編入後各地で作業従事入「ソ」せず、昭和二年三月二十六日大連出發三月三日博多上陸</p> <p>將校の大部分（一一五名）は一〇月七日海城將校大隊に編入後、十一月一日海城出發、十二月一日満州里經由入「ソ」</p> <p>部隊長 大佐 松村重夫</p>					

		至日						
		昭 20	昭 19		昭 17	昭 16	昭 15	昭 13
年月日		8	6	5 5 4	4	5	7	12
		9	90	1			10	
概要		<p>間島省延吉（間島）において編成完結 下士官候補者の教育実施（教育期間一年） 軍令陸甲第一四号発令 関特演により教育停止 教育再開 甲種幹部候補者の教育隊となつた。 教育期間、六月に短縮された。 間島より、牡丹江省石頭に移駐 軍令陸甲第七五号発令（昭和二〇年度入隊者に関する件？） 編成増強 開戦と同時に、第一方面軍司令部の命により、二ヶ大隊を編成、第五軍の直轄部隊として牡丹江方面に出動 第一大隊は、掖河付近において陣地構築中、夜間列車により磨頭石に前進、途中空襲を受け、損害をだした。</p>						
摘要								
摘要								

関東軍歩兵第二下士官候補者隊

通称号

満第六〇四部隊

徳第一三九八一部隊

9	9	8	8	8	9	9	8	9	9	8	8	8	8
30	28	23 ごろ	19 ごろ	9	17	8	18	10	8	17	18	12	
<p>一部をもつて挺身隊を編成、出撃し損害をだした。 磨刀石駅付近において「ソ」軍戦車と交戦し、損害をだした。 鏡泊湖付近において武装解除 主力は、蘭岡第二八五作業大隊に編入 同地出発、綏芬河經由入「ソ」</p> <p>一部は、横道河子において武装解除後、海林に移動 海林第一三六作業大隊に編入 同地出発、綏芬河經由入「ソ」</p> <p>第二大隊は、東京城野戦陣地に進駐のため、行動開始 敦化において武装解除 敦化飛行場に集結 同地編成の第二四三作業大隊に編入 同地出発、綏芬河經由入「ソ」</p> <p>部隊長 初代大佐 石井 信 二代大佐 菊池 三郎 少佐 荒木 護夫 最終大佐 小松 茂久萬</p>													

年月日	昭		
	20		
	8	6	5
	9	31	1
略	<p>昭和十九年十二月五日旅順において軍隊区分により第三臨時下士官候補者隊編成。 爾後下士官候補者の教育に従事。 軍令陸甲第七五号により編成下令。 旅順において第三臨時下士官候補者隊の人員を基幹として編成完結。 同日より將校要員ならびに下士官候補者の教育に従事。 開戦と共に下士官候補者二、七五〇名を原隊復帰せしむ。 部隊は同日第三方面軍の司令官の隷下に入らしめられ旅順地区隊となり一ヶ中隊を大連警備の為派遣、旅順防衛のため各中隊を次の如く派遣し陣地構築に従事す。</p> <p>第一中隊 白玉山附近 第二中隊 老頭山 第三中隊 白銀山 第四中隊 老律嘴</p>		
歴			
摘要			

関東軍歩兵第一幹部教育隊略歴

(関東軍第三臨時下士官候補者隊)

通称号

徳第一三九八二部隊
満第一二九部隊

略

歴

摘要

1631

	9	8	8	8	8
	4	23	22	17	15
<p>第五中隊 砲台山</p> <p>停戦。</p> <p>停戦に伴い「ソ」軍により左の如く武装解除されたる後入「ソ」す。</p> <p>新京陸軍刑務所囚人約三〇〇名第三方面軍司令官の命令により編入訓練隊と仮称一ヶ中隊を増設す。</p> <p>旅順において主力は武装解除せらる。</p> <p>水師營に移動</p> <p>海城に移動したる後十一月十日同地出発入「ソ」。</p> <p>部隊長</p> <p>大佐 戸田 義直</p>					

1632

				昭 20	年 月 日
				4	
7	6	4		1	
	10	30	10 頃		概 要
<p>東安省西東安において第五軍隷下の下士官要員教育の目的をもつて発足し「特別補充下士官候補者隊」と呼称す 爾後同地において下士官候補者の教育訓練等に従事 第一次学生約一五〇〇名人隊 第一次学生教育終了、次期教育助手として二〇数名を残置し他はそれぞれ原隊に復帰せしむ 軍令陸甲第一〇六号により関東軍歩兵第二幹部教育隊と改称</p> <p>編成 本部(八紘)長、少佐 東 条 省 三 第一中隊(七生)長、大尉 山 内 吉 次</p>					
					摘 要

関東軍歩兵第二幹部教育隊略歴

通称号 満第三一四五部隊 徳第二一〇九七部隊

1633

昭 20	7	8
15	9	0
<p>第二中隊（一誠）長、大尉 元浦光男</p> <p>第三中隊（振武）長、大尉 藤島境</p> <p>第四中隊（義烈）長、大尉 後藤義二郎</p> <p>第五中隊（光華）長、大尉 前野孝</p> <p>第六中隊（富嶽）長、大尉 寺田一雄</p> <p>第七中隊（正気）長、大尉 川井克雄</p> <p>全滿各部隊（除第四軍）よりの派遣者約二〇〇〇名第二次学生として入校</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>同時に第一三五師団長の命により自動貨車約五〇台の配当をうけ梯団を編成し牡丹江方面に出発</p> <p>本部、自動車梯団（一中四区隊）</p> <p>第一梯団（三中、六中一区隊、七中四区隊）</p> <p>第二梯団（二中、五中二、三区隊、七中一、二、三、五区隊）</p> <p>第三梯団（一中一、二、三区隊、四中二、三、四区隊、六中二区隊）</p>		

1634

			昭 20
8	8	8	8
14	13	10	9
道河子方面に脱出	楚山付近において「ソ」軍の攻撃をうけ四敵状況となり各小行動群に別かれ二	夕刻約二〇輛林口着	第一三五師団砲兵援護隊（五中一区隊） 梯団援護隊（四中一区隊） 馬匹輸送隊（本部より一五名） 家族援護隊（本部より一五名）
	数分離	平陽、鶏寧付近において「ソ」軍機の攻撃をうけ炎上、破壊等により車輛約半	本部、自動車梯団の行動
		降雨による悪路のため運行不能車続出し梯団は各個に行動、途中黒台、東海、	本部（隊長以下六〇名）自動車梯団（山内大尉以下四〇〇名）は二一時西東安
		出発	

									昭 20
8	8	9	8	10	9	9	8	8	8
18	9	22	22	25	18	15	28	23	20 頃
<p>二道河子にて各梯団の分散者約二〇〇名を収容 主力は「ロマノフカ」「ロシヤ」人部落に集結、付近山中において「ソ」軍一 ケ中隊と交戦戦死者約一〇名を生ず 同地において武装解除 海林第一四四作業大隊に編入 同地出発 綏芬河經由入「ソ」 一部渡部准尉以下六二名は横道河子付近にて「ソ」軍と交戦、分散状態となり 同准尉は約三〇名を掌握、本部に追及せるも本部の所在不明のため南下 敦化付近にて武装解除、所在部隊と同行動</p> <p>第一梯団の行動</p> <p>藤島大尉以下五五〇名西東安出発 適道付近にて「ソ」軍戦車の攻撃をうけ蘭嶺屯付近にて江上中隊、渡辺中隊は</p>									

至自				
8	9	9	8 8	8
15	15	1	20 17	14
<p>別行動となる</p> <p>以降主力は途中「ソ」軍機の攻撃を受けつつ麻山到着、同地において「ソ」軍戦車隊の攻撃あり挺身斬込みを敢行脱出せるも藤堂軍曹以下小群に別れ林口北方高地にいたり更に「ソ」軍歩兵部隊の攻撃をうけ分散したが藤島大尉以下主力は林口、楚山、七星方面に鉄道沿いに南下、七星付近より西方山中を二道河子に向う</p> <p>藤島大尉以下主力は渡辺中隊群他分散群を遂次集結（約二〇〇名）し第二梯団主力とともに小行動群を掌握しつつ南下中石頭河子付近において「ソ」軍監視隊の攻撃をうけ第二梯団および渡辺中隊群と分離浜江省、冷山に戻る</p> <p>藤島大尉以下主力は冷山において武装解除し海林に収容さる</p> <p>海林第一四四作業大隊に編入、本部と同行動</p> <p>江上少尉群の行動</p> <p>主力と分離後山中を林口に向つたが林口北方山中にて再び「ソ」軍の攻撃をうけ樋口少尉群は別行動となる。</p>				

								昭 20
8	8	8	10	8	8	8	8	8
22	20	14	6	28	19	16	27	22
<p>江上少尉群は楚山、七星北方山中を経て二道河子にいたり梯団主力に合流 樋口少尉群も二道河子にて本部梯団主力に合流 渡辺少尉群の行動 林口に到着、同夜「ソ」軍自動車部隊と交戦 二道河子に到着、梯団主力と合流 石頭河子付近橋梁で「ソ」軍監視隊と交戦梯団主力は渡河せるも渡辺少尉以下 約一〇名は通過不能となり主力と別行動し葦河北方を迂廻南下舒蘭付近にて武 装解除 吉林に収容、所在部隊と同行動 藤堂軍曹群の行動 麻山付近の戦闘で主力と分散した藤堂軍曹以下の行動群は遂次合流して約四〇 名位となり宝林方面に向う。 七星付近において「ソ」軍と交戦戦死および行方不明者を生ず 五河林付近より山中を横道河子に向い更に西進、途中土匪と交戦しつつ八月二</p>								

オ七小

昭 20													
8	8	8	8	8	10	9							
18	14	12	10	9	25	29							
二道河子着山内大尉群および各梯団の分離者と合流	名と合流	古城鎮北方に到着、山中を二道河子に向う途中第一梯団藤島大尉以下約二〇〇	襲撃をうけ蘭嶺屯方面に脱出並河方面に向う、若干の戦死者あり	主力は「ソ」軍戦車部隊の追撃をうけ適道北方炭礦に避難同地において土匪の	夜半元浦大隊は梯団主力よりおくれ別行動となる	路のため相当数の落伍者を生じたがそれらは大部自動車梯団に収容された	平陽付近において「ソ」軍の攻撃をうけ若干の損害を生じ、かつ降雨による悪	元浦大尉の指揮により元浦大隊約三七〇名、前野大隊約四四〇名西東安出發	第二梯団の行動			一面坡付近の熊本開拓団にいたり武装解除後海林第一四四作業大隊に編入	綏芬河経由入「ソ」

								昭 20
	8	8	8	8	8	10	8	8
	28	20	16	14	13	25	30	28
	<p>通化方面に南下の目的をもつて集結人員を再編成し森林鉄道沿いに横道河子北方冷山經由</p> <p>石頭河子東方にて渡河せんとし「ソ」軍の攻撃をうけ主力は突破し爾後分散兵力を収容し浜江省「ヤプロニ」に到る</p> <p>「ヤプロニ」にて前野大尉以下約一六〇名武装解除、海林に収容さる</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>元浦大隊の行動</p> <p>適道付近にて「ソ」軍戦車部隊の攻撃をうけ山中に退避</p> <p>蘭嶺屯西方にて「ソ」軍と交戦、分散脱出</p> <p>元浦大尉以下約四〇名重河に到着</p> <p>二道河子着</p> <p>「ロマノフカ」にて武装解除</p> <p>爾後本部自動車梯団と同行動</p>							

オ八内

8	8	8	8
10	10	15	27
<p>第三梯団の行動</p> <p>寺田大尉以下六七〇名四時列車にて西東安出発</p> <p>永安、東海付近にて「ソ」軍機の攻撃をうけ相等数の損害を出し列車の運行不能となり爾後行軍により各大隊毎に林口に向う途中麻山付近にて「ソ」軍戦車部隊の攻撃により部隊は四散し梯団長寺田大尉は麻山南方地区にて自決</p> <p>神代大尉群の行動</p> <p>東海付近における戦闘による戦死傷者処理のため松本中隊を残置し大隊主力は西進平陽付近にて「ソ」軍戦車の追撃をうけ多数の生死不明者を生じたので鉄道北側山中に入り麻山北方古城鎮南方地区を経て二道河子に向う</p> <p>東海付近に残置した松本中隊主力と合流</p> <p>二道河子付近通過</p> <p>横道河子、冷山間において鉄道突破にあたり「ソ」軍の攻撃をうけ松本中隊は主力と分離</p> <p>大隊主力は吉林に向い南下向陽村、舒蘭、大平村を經由</p>	<p>東海付近における戦闘による戦死傷者処理のため松本中隊を残置し大隊主力は西進平陽付近にて「ソ」軍戦車の追撃をうけ多数の生死不明者を生じたので鉄道北側山中に入り麻山北方古城鎮南方地区を経て二道河子に向う</p> <p>東海付近に残置した松本中隊主力と合流</p> <p>二道河子付近通過</p> <p>横道河子、冷山間において鉄道突破にあたり「ソ」軍の攻撃をうけ松本中隊は主力と分離</p> <p>大隊主力は吉林に向い南下向陽村、舒蘭、大平村を經由</p>	<p>東海付近に残置した松本中隊主力と合流</p> <p>二道河子付近通過</p> <p>横道河子、冷山間において鉄道突破にあたり「ソ」軍の攻撃をうけ松本中隊は主力と分離</p> <p>大隊主力は吉林に向い南下向陽村、舒蘭、大平村を經由</p>	<p>横道河子、冷山間において鉄道突破にあたり「ソ」軍の攻撃をうけ松本中隊は主力と分離</p> <p>大隊主力は吉林に向い南下向陽村、舒蘭、大平村を經由</p>

	昭 20	昭 21	昭 20
	8	8	10
	30	13	3
<p>江密峯付近において武装解除</p> <p>吉林第二一作業大隊編入</p> <p>琿春経由入「ソ」</p> <p>松本中尉群は冷山において武装解除後海林に収容</p> <p>海林第一四四作業大隊に編入、本部と同行動</p> <p>後藤大尉群の行動</p> <p>朝麻山付近に行動中「ソ」軍戦車隊の攻撃をうけ損害多大のため小群に別れ脱出、集合予定地穆稜河畔に集合した者は約六〇名であつたが爾後集団行動不能のため少人数に分散南下</p> <p>後藤大尉群は石頭にいたり所在部隊（第一二四師団の一部）と同行動</p> <p>その他の小行動群は「ロマノフカ」天橋嶺、牡丹江、吉林等にいたり所在部隊と同行動</p> <p>第一三五師団砲兵援護隊の行動</p>			

	8	8
8	9	10
<p>地にて梯団移動の蓄備</p> <p>浅野少尉以下六〇名自動車により西東安出發、永安において全員下車、付近高地にて梯団移動の蓄備</p>	<p>梯団援護隊の行動</p> <p>岩鼻群は列車により西東安を出發八月十一日七星を経て掖河、横道河子にいたり武装解除後拉古に收容され同地所在部隊と同行動</p>	<p>日「ソ」開戦とともに松永少尉以下約九〇名は野砲兵第一三五連隊長の指揮下に入る</p> <p>作戦上松永少尉群（六〇名）と岩鼻軍曹群（三〇名）とわかれ松永群は砲兵隊主力と同日朝西東安出發、岩鼻群は一部の砲兵隊援護弾薬輸送のため七星に向つて出發</p> <p>松永群は勃利、亜河、二導河子を経て二十二軒にて第二梯団主力と合流、道林糧秣庫にて「ソ」軍と交戦九月一日終戦を知り 装解除後海林收容所にいたり所在部隊と同行動</p>

					昭 20
8	8	8	8	8	8
18	9	18	15	18	11
<p>午前五時東安よりの最終列車に乗車林口以後退</p> <p>浅野隊を二分し浅野少尉以下約三〇名は第一三五師団長の護衛小隊として列車により他は自動車により後退</p> <p>同日夕刻樺林付近橋梁にて「ソ」軍戦車隊の攻撃を受け列車を破壊せられ運行不能となる</p> <p>浅野少尉以下主力は行軍により掖河に到着、戦闘参加後横道河子にいたり武装解除</p> <p>拉古に収容所在部隊と同行動</p> <p>林口にて分離せる自動車組は第一三五師団隷下部隊と同行動</p> <p>馬匹輸送隊の行動</p> <p>夜半高橋隊医少尉以下一五名乗馬により西東安出発、途中しばしば「ソ」軍の攻撃を受けつつ山中に退避後退</p> <p>二道河子付近に到着、森林鉄道沿いに八月二十九日横道河子西方を迂回</p>					

オ九ノ

	11	10	8	8	9	8
	8	30	24	9	1	30
道林着	同地において武装解除後海林に移送同地所在部隊と同行動					
家族援護隊の行動	神山曹長以下一五名は部隊の家族および軍酒保軍属を護衛し新京に向い出發せ るも哈爾濱より拉浜線にて凶門に向い八月十七日蛟河にて終戦を知り教化飛行 場に収容され八路軍により武装解除さる 八路軍の作業のため約一〇〇〇名青溝子に移動同地に分宿せるも爾後住民の庄 迫、食糧不足等により老人、幼児等は殆んど死亡解散状態となる 一部の者は新京に向つて出發 新京着、同地において解散					
隊長						
小佐 東条省三						

昭 20
昭 19
昭 17

	昭 20	昭 19	昭 17
	8 8 8	12 8	8
	80 25 20	25	9 末
<p>教育再開（隊長片桐大尉） 以後、高射砲、機関銃、照空の各下士官候補者の教育に従事 新京に移駐 関東軍編成改正により「関東軍高射砲幹部教育隊」となり、教官、助教の更送 ならびに増員、兵（約三〇名）の編入等があり、教育要員に、幹部候補生（主 として軍曹の階級のもの）を加えた。 この時期より、教育期間は、五ヶ月（通常は、六ヶ月）となる。 下士官候補者を内地に帰還せしめた（内地で教育実施の予定） 幹部候補生を原隊に復帰せしめた。（教育終了） 新京要地の防空に配備 編成 高射砲大隊 本部、一中、二中、機砲中 照空大隊 本部、三中、四中 公主岑に移動途中、苑家屯付近において「ソ」軍と交戦損害を出した。 公主岑において武装を解除、第六作業大隊（長、大佐、加藤隆峯）に編入 同地出發、黒河經由入「ソ」</p>	<p>部隊長 中佐 吉岡文男 少佐 片岡勇 大佐 加藤隆峯</p>		

年月日		概要	摘要
昭 16	昭 15		
7	12 7		
16	1 10	<p>軍令陸甲第一四号により編成下令 吉林省公主岭において編成完結</p> <p>編成</p> <p>本部</p> <p>教育隊</p> <p>第一区隊</p> <p>第二区隊</p> <p>第三区隊</p> <p>第四区隊</p> <p>四区隊</p> <p>高射砲</p> <p>機関砲</p> <p>照空</p> <p>在満各部隊よりの下士官候補者の教育を実施 臨時編成下令</p> <p>分遣中の下士官候補者は原隊復帰</p> <p>吉岡隊長は野戦高射砲第五三大隊長に、幹部は一部の残留者を残し野戦防空隊司令部に充用</p>	
			摘要

関東軍高射砲下士官候補者隊略歴

通称号 満第三〇二部隊

1647

		昭 20		昭 17		昭 16		昭 13		昭 12		年 月 日
8	8	7	6	3	7			3	8			
10	9	15	29									
<p> 龍江省土爾地哈において創立 騎兵下士官候補者二五〇名 戦車隊よりの候補者約五〇名 計三百名を始めて入校せしめ、爾後下士官候補者の教育に任じた。 関特演の際一時閉鎖 再度教育開始。 黒河省山神府に移駐。 編成人員を充足し在隊人員は次のとおりとなる。 将校 約三〇名 下士官 約八〇名 兵四ケ中隊 約二五〇〇名 目「ソ」開戦にともない山神府において歩兵三ケ大隊と連隊砲一ケ中隊を編成 同日夕刻山神府を出発 黒河省二站到着、一ケ大隊を独立混成第一三五旅団砲兵隊長長嶋少佐の指揮 </p>												
												略
												歴
												摘要

関東軍騎兵下士官候補者隊略歴

通称号 徳第一三九八三部隊 満四六四部隊

略

歴

摘要

1648

		自		
		9	9	8 8 8
		10	5	16 14 13
		<p>下に入らしめ主力は孫呉に到る。 二站および孫呉において「ソ」軍と交戦。 主力は孫呉において武装解除 一部は二站において武装解除。 主力は臨時第九作業大隊に編入。 黒河経由入「ソ」。</p>		
隊長				
初代	中佐 東 八百蔵			
二代	中佐 山下 彦平			
三代	中佐 田 幡 武			
四代	大佐 住 田 美夫			
五代	中佐 大 田 良雄			
六代	少佐 多 田 俊夫			
七代	少佐 竹 下 忠美			

昭 17	昭 16	昭 15	年 月 日	関東軍輜重兵下士官候補者隊 略歴 通称号 満第四七八部隊、徳第一三九八七部隊
8	7	7		
	16	10		
教育再開 幹部（一部の残留者を除く）は戦時命課により各隊に充用 分遣中の下士官候補者は原隊復帰 臨時編成下令 教育期間 八ヶ月と一〇ヶ月 在満各部隊よりの下士官候補者 教育要員 第一中隊（二区隊編成） 輓馬 第二中隊（ ） 自動車			概	要
軍令陸甲第一四号により編成下令 牡丹江市において編成完結 編成 本部 教育隊			要	摘 要

1650

昭	至自	至自
19	昭 20	昭 20
5	9 9 9 8 8 5 4 8 12	9 9 9 8 8 5 4 8 12
	中旬 10 5 25 9 1 15	中旬 10 5 25 9 1 15
	<p>陸軍機密第二三六号により、「関東軍輜重兵幹部教育隊」と改称、准尉、曹長、幹候（二期）、特別下士官候補者（兵長が主体）の教育を新に実施、編成は次のとおりとなつた。</p> <p>本 部</p> <p>第一中隊……………（二区隊）……………幹 候</p> <p>第二中隊……………（ 〃 ）……………下 候</p> <p>第三中隊……………（ 〃 ）……………准 曹</p> <p>第四中隊……………（ な し ）……………特下候</p> <p>関東軍編成改正により、将校下士官等約半数の転出があつた。</p> <p>幹候、下候、准曹、特下候は、修業により原隊に復帰</p> <p>軍令陸甲第七五号により、朝鮮軍よりの幹候の教育を実施</p> <p>関東軍の命により鏡泊湖付近へ輸送業務</p> <p>寧安県南湖頭に集結、同地において武装解除</p> <p>蘭崗に至り、同地編成の第二八三作業大隊（長藤田大尉）に編入</p> <p>蘭崗を出発、綏芬河經由「ソ」</p> <p>部隊長 初代 中佐 谷 村</p> <p>二 代 少佐 新 免 祐 一</p> <p>三 代 少佐 河 濟 人 也</p> <p>四 代 少佐 宇 田 川 金 蔵</p>	

										昭		年 月 日							
										20			17						
10	9	9	9	8	8	8	5	4	3	5	18								
										1	14	7	2	19	10	9	23	5	18
										<p>部隊長 大佐 山下 信夫</p> <p>黒河經由入「ソ」</p> <p>奉天出発</p> <p>主力は、奉天第一九作業大隊に（一部は第一四、第一五各作業大隊）に編入。</p> <p>一時奉天郊外八家子に移動したが再び復帰し同地において武装解除</p> <p>と共に帰還。</p> <p>満鉄、電々等出身者二〇〇名及び軍属一〇〇名解雇、これらはその後一般邦人と共に帰還。</p> <p>幹部候補生を残し他は原隊復帰、然し殆んどが最寄りの部隊に合流。</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>現役兵（在満者）五〇〇名入隊。</p> <p>実施。</p> <p>幹部候補生、下士官候補者、将校特別補充要員及び教導兵の通信技術の教育を</p> <p>奉天において編成完結</p> <p>軍令甲第二〇号により編成下令</p>								<p>概</p> <p>要</p>	
										<p>満第五四九部隊</p> <p>徳第一三九八八部隊</p> <p>通称号</p>								<p>関東軍通信教育隊略歴</p>	
										<p>摘要</p>									

1652

至自至自		至自			昭	昭	昭	年 月 日		
					20	18	15			
9	9	9	8	8	8	7	8		7	
19	9	18	1	26	24	19	14	10	9	10
<p>新東京において経理部下士官候補者隊として編成 「関東軍経理部幹部教育隊」と改称改編 将校特別補充学生（七〇名） 甲幹及び乙幹（六五〇名） 下士官候補学生（五三〇名） 日「ソ」開戦 下士官候補者原隊復帰 主力は通化に向い出発 一部は疎開のため鎮南浦に向かい、後昭和二一年一〇月仁川より内地帰還 朝陽鎮において武装解除 吉林到着、解散 主力は、吉林第二〇三、第二〇七各大隊に編入 掖河出発、黒河經由入「ソ」</p>								概要		
<p>部隊長 大佐 藤吉重二</p>								摘要		

関東軍経理部幹部教育隊略歴

通称号

満第八一五部隊
徳第一三九二三部隊

要

摘

要

1653

年 月 日	昭 15	昭 16	昭 17	昭 18
	5	7	4	7
	16			
概 要	<p>新京市（孟家屯）において関東軍防疫廠、（満洲第一〇〇部隊）の教育部として発足し、所屬隊員は兼務の状況であつた。</p> <p>臨時編成下令</p> <p>分遣中の下士官候補者は原隊復帰</p> <p>幹部（一部の残留者を除く）は戦時命課により各隊に充用</p> <p>教育再開</p> <p>軍令陸甲第六九号により編成完結</p> <p>編成</p> <p>本部</p> <p>教育隊………第一区隊↓第四区隊</p>			
摘 要				

関東軍獣医下士官候補者隊略歴

通称号

満第五一三部隊

徳第一三九二五部隊

要

摘

要

1654

昭 昭																															
20 19																															
9	8	8	8	8	7	5	8																								
2	28	24 ごろ	18	9	7 ごろ	1	1																								
<p>編成改正、幹部の教育実施にともない、所隊員を増強した。 軍令陸甲第七五号編成改正発令により「関東軍獣医部幹部教育隊」と呼称 在滿各部隊よりの准尉、曹長の教育実施 准尉、曹長は、原隊に復帰せしめた。(教育未了)、第四区隊(長仙田見士) を警備のため通化省水洞の野戦貨物廠に派遣(八・一五水洞着) 本隊は、徒歩により、通化に向かい新京出發 通化に移動途中、朝陽鎮(海龍の北方)で武装解除 吉林市(師導大学)に至る。 幹部は、將校大隊に編入、齊々哈爾濱滿洲里經由入「ソ」 下士官、兵は吉林第二〇五作業大隊(長中尉大網元造)に編入</p>																															
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="4" style="text-align: center;">少佐 近藤 藤 当 栄</td> <td rowspan="2" style="text-align: center;">隊長</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">第一区隊</td> <td style="text-align: center;">第二区隊</td> <td style="text-align: center;">第三区隊</td> <td style="text-align: center;">第四区隊</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">中尉 大道寺 哲太郎</td> <td style="text-align: center;">少尉 出浦 五六</td> <td style="text-align: center;">見士 高田 勝 善</td> <td style="text-align: center;">見士 仙田 幹 二</td> <td style="text-align: center;">区隊長</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">幹候 約九〇</td> <td style="text-align: center;">准尉 約三〇</td> <td style="text-align: center;">下候 約八〇</td> <td style="text-align: center;">下候 約八〇</td> <td style="text-align: center;">区隊員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">昭一〇月 19より開始</td> <td style="text-align: center;">207 三月 7より開催</td> <td style="text-align: center;">昭一〇月 15より開始</td> <td style="text-align: center;">昭一〇月 15より開始</td> <td style="text-align: center;">教育期間</td> </tr> </table>								少佐 近藤 藤 当 栄				隊長	第一区隊	第二区隊	第三区隊	第四区隊	中尉 大道寺 哲太郎	少尉 出浦 五六	見士 高田 勝 善	見士 仙田 幹 二	区隊長	幹候 約九〇	准尉 約三〇	下候 約八〇	下候 約八〇	区隊員	昭一〇月 19より開始	207 三月 7より開催	昭一〇月 15より開始	昭一〇月 15より開始	教育期間
少佐 近藤 藤 当 栄				隊長																											
第一区隊	第二区隊	第三区隊	第四区隊																												
中尉 大道寺 哲太郎	少尉 出浦 五六	見士 高田 勝 善	見士 仙田 幹 二	区隊長																											
幹候 約九〇	准尉 約三〇	下候 約八〇	下候 約八〇	区隊員																											
昭一〇月 19より開始	207 三月 7より開催	昭一〇月 15より開始	昭一〇月 15より開始	教育期間																											

昭 21	自 至						昭 20	昭 20
5	10	10	8	9	9	8	8	9
1	18	17	28	25	1	20	16	18
<p>吉林出發、黒河經由入「ソ」(一〇・ニチタ地区二四収着)</p> <p>野戦貨物廠に巡遣された第四区隊員は、本廠の命により新京に向かい水洞を出 発</p> <p>四平駅下車</p> <p>揚木林集結</p> <p>同地出發、黒河經由入「ソ」(イルクーツク着)</p> <p>注、作大名が不詳だが、第四作大と推定</p> <p>大道寺中尉以下幹候、下候約一七〇名、吉林到着 後、豊満ダムの機械撤去作業に従事</p> <p>同地発、琿春に至る。同地において作業に従事</p> <p>同地出發、入「ソ」(「ウオロシロク」地「レチホフカ」着)</p> <p>部隊長 獣 大佐 水野基次 獣 少佐 浅井正次</p>								

<p style="text-align: center;">關東軍技術部教育隊略歴</p> <p style="text-align: center;">(技術教育部練習隊、第一兵技教育隊、第二兵技教育隊)</p> <p>通称号 徳第一三九八部隊(満第二六三部隊、満第二六六部隊)</p>	<p style="text-align: center;">略 歴</p>	<p style="text-align: center;">摘 要</p>
<p style="text-align: center;">年 月 日</p> <p style="text-align: center;">昭 20</p> <p style="text-align: center;">6 5</p> <p style="text-align: center;">1 1</p>		<p>關東軍技術部教育隊は昭和十五年十二月哈爾浜において關東軍野戦兵器廠の隷下部隊關東軍技術教育部練習隊として発足し、爾後第一兵技教育隊(哈爾濱・満第二六三部隊)および第二兵技教育隊(新京と孫家、満第三六六部隊)に改編され、技術兵および下士官候補者の教育に従事。</p> <p>軍令陸甲第七五号により編成下令。</p> <p>哈爾浜において第一兵技教育隊および第二兵技教育隊の人員をもつて編成完結。</p> <p>下士官候補者、甲、乙幹部候補生、将校特別補充の将校要員等の教育に従事。</p> <p style="text-align: right;">編成</p> <div style="margin-left: 20px;"> <p>部隊本部 中佐 梶浦俊彦</p> <p>第一大隊 長少佐 飯沼広元</p> <p>第二大隊 長少佐 沓形節二</p> <p style="margin-left: 40px;">第一中隊 第二中隊 第三中隊 第四中隊 第五中隊 第六中隊 第七中隊 第八中隊</p> </div>

1657

8	8	8	8
22	15	10	9
<p>同日戦闘態勢を解き平時編成となる。 香坊に集結。同日在満召集者および軍属を解散（約四五〇名）</p>	<p>ハ爾濱において停戦。</p> <p>部隊本部 中佐 梶浦俊彦</p> <p>第一大隊（歩兵） 長少佐 飯沼広元</p> <p>第二大隊（光戦重隊） 長少佐 沓形節一</p> <p>第一中隊（歩兵） 第二中隊（歩兵） 第三中隊（歩兵） 第四中隊（歩兵） 光第一移動修理班 光第二移動修理班</p> <p>第五中隊（九七戦車） 第六中隊（九七軽装甲車） 第七中隊（九五軽戦車） 第八中隊（九四軽装甲車）</p>	<p>第四軍司令部のハ爾濱移駐と共に同司令官の隸下に入る。 同日各隊より派遣の被教育に原隊復帰を命じたが、遠隔地よりの派遣者（約一〇〇名）は列車輸送等不能のため部隊と行動を共にする。 部隊基幹要員と原隊復帰不能の派遣者をもって次のように編成を改め戦闘態勢をととのえハ爾濱および孫家付近の警備に従事。 編成</p>	

		8	8
		26	22
	<p>部隊長 中佐 梶浦 俊彦</p>	<p>爾後十月五日以降逐次牡丹江出發、綏芬河經由入「ソ」。</p>	<p>海林着。海林収容所入所。</p>
			<p>同地において武装解除。同日海林に向け出發。</p>

1659

昭					昭	年 月 日	概 要
20					19		
8	8	8	8	5	5		
28	21	16	10	1	2		
<p>通称号 満第九〇一部隊 徳第一三九九部隊</p> <p>編成 本部 自動車中隊……………一 整備 中隊……………一 教育 班(自動車班四、ディーゼル班五) 修理 班</p> <p>在満の各車輛部隊よりの将校、下士官、兵に対し教育を実施 軍令陸甲第七五号発令により、編成増強(人員一五〇となる)。 関東軍補給監部の隷下に入り、移動修理班を編成 新京を自動車により出発 北鮮、平壤に到着 平壤において武装解除 将校は、美靱洞収容所に、下士官兵は三合里収容所にそれぞれ入所。 将校は、美靱洞編成の将校大隊(長、大佐花井京之助)に編入</p>							
							摘 要

関東軍整備教育隊略歴

通称号 満第九〇一部隊
徳第一三九九部隊

概

要

摘

要

1660

昭 21	昭 20	昭 20
6	9	10
15	8	24
部隊長 少佐 高園 遼 弘 同地出発、與南出港、入「ソ」(ボセット上陸)		同地出発、與南出港入「ソ」(ボセット上陸)
下士官、兵は秋乙に至り、同地編成の第一作業大隊に編入		